

ヤマト福祉財団NEWS

Yamato Welfare Foundation 2009 Autumn

10月20日発行 No24

クロネコメール便配達特別報告会 IN 大宮ソニックシティ 「メール便を配達することは、社会参加すること。」



報告してくださったクロネコメイトのみなさんと朝日雅也教授(埼玉県立大学保健医療福祉学部)、有富理事長

私たちの賛助会費が活かされています
奨学生レポートVol.4

見えなくても、聞こえなくても、
できるはず。

福祉はロマンだ Series11
ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 受賞者は今

マナー教育から職場定着化まで

家族ぐるみの支援で雇用先の信頼を得る
宮崎 潔さん 名古屋市障害者雇用支援センター 所長

スワン工舎 卒業生訪問 スーパーマーケットが僕たちの働く場です

この街で一緒に生きていく
障がい者のクロネコメール便
配達

“就職”という夢を、メール便配達のカバンにつめこんで。



スワンベーカリー銀座店 12年目のリニューアルオープン

YWF TOPICS

私たちの賛助会費が活かされています
見えなくても
聞こえなくても
できるはず。

林 理沙さん

沖縄大学人文学部福祉文化学科4年



〈プロフィール〉 高校卒業後、脳腫瘍が原因で中途失聴に。これをきっかけに福祉に関心を持ち、福祉専門職の養成を目的とする沖縄大学人文学部福祉文化学科に入学。在学中に下肢障がい（車いす）を利用することになり、さらに視覚障がい（全盲）になるが、周囲のサポートも受けながら通学を継続し、卒業を目指している。（写真：ボランティア学生、職員、教授と一緒に正門前で。真ん中が林 理沙さん）

中途障がい（全盲）で得た「気づき」
階段教室の最前列、車いすに腰掛け、背中に意識を集中している一人の学生がいます。林理沙さんです。全盲ろうの彼女にとって講義を理解する術は、学生ボランティアや職員（障がい学生支援コーディネーター）の方が背中に通訳して書くひらがな文字。
状況が一変したのは19歳のとき。病により聴覚を失いました。すると健常者から障がい者になって、今までとは違う世界が見えてきました。そう、福祉の世界です。そして一つの疑問が浮かびます。「なぜ、福祉行政の現場に、当事者の姿がないんだろ



この日は「認知と脳Ⅰ」、前期最後の講義

途 中、体調を崩して休学することもありましたが、むしろその経験は、林さんの学びたいという気持ちをより食欲にさせたと言います。「休学中はとくに何をやるっていうスケジュールもありません。かたや大学には自分の知っている友だちもいますし、なにより「知る」ことは面白いからです」
しかしその後、林さんは24歳

大切にしたのは、今！
かねてから、視野を広げたいと大学進学に憧れのあった林さんは、福祉を専門的に学ぶ決意をし、病氣と向き合いながら22歳で沖縄大学に入学しました。



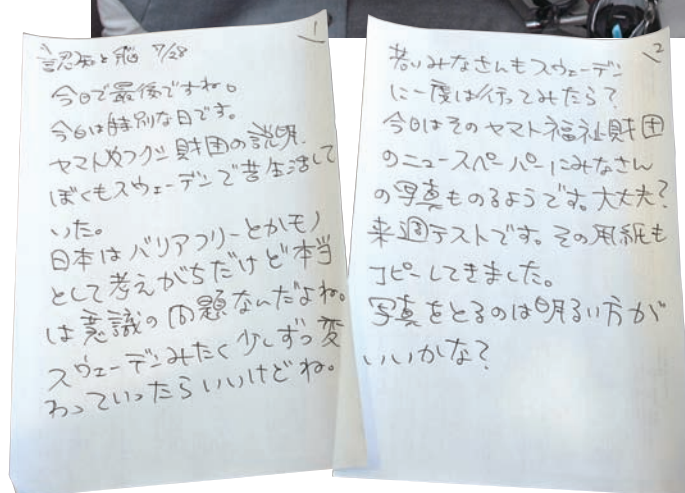
学生支援の拠点となる「ゆいまーる室」で、学生や職員と

私たちは奨学生みなさんが社会で活躍することを心待ちにしています。

障がい者奨学金制度
当財団では、障がいのある大学生（短大除く）に奨学金による助成（年間60万円／返済不要）を行っています。夢に向かって努力する34名の方々が、現在この制度を利用しています。



ノートテイクの原稿を元に林さんの背中に通訳する



先生の話だけでなく、周りの状況も一緒に伝える



奨学生レポート

Vol.4

のときに下肢障がいですりす利用するようにになり、昨年には視覚を失いました。

「さすがに盲ろうになったときには絶望的になりました。ですが指導してくれる谷口教授や、ノートテイクサークルのみんな、大学教職員、学内外の友達など、多くの方々に支えられ、改めて人と人とのつながり、信頼関係の大切さを知りました。そして「病気を責めたり、自分を責めたり、障がいを責めたりすることは簡単ですが怒っても仕方がありません。むしろ、たくさんさんの生活課題があるけど一つひとつクリアして、『なにができるんだろう?』っていう自己実現を考えたいんです」。

■ 本当のユニバーサルって：

授業では、2人のノートテイクカーと1人の通訳担当者の計3名のボランティアが、講義の内容を逐一、林さんに伝え、サポートします。試験も同じようなかたちで別室受験し、レポートは林さんが声に出したものを代筆してもらいます。

「聴覚障がいだった人が視覚障がいを持ってしまい、ふつうなら『対応できないから辞めてほしい』と言われてもおかしくないところだと思いますが、支援してくれる人が本当にいっぱいいて、こんな私でも大学に通う

て勉強している——。見えなくなつてから、家に一人でいたら時間もわかりませんが学校にいれば知り合いがいてすぐに教えてもらえるので障がいを感じることはあまりありません。

ノーマライゼーションとかユニバーサルな社会って、こういうことではないでしょうか」

卒業後の目標について、林さんに訊ねると、「実現できるかまったく分からないけど、スウェーデンとかフィンランドとか、福祉がすごい国に留学してみたいっていう気持ち強いですがね。世界中の同世代の盲ろう者たちはどんな生活をしているのか興味があるんです。そして沖縄県の盲ろう福祉についても勉強をして、当事者の発想を持って福祉行政の現場に携わりたくな、と思っています」と答えてくれました。

〈支える／支えられる〉の壁を飛び越えて、自由に自分を磨こうとする、タフな女性の姿がそこにはありました。



私たちの賛助会費が活かされています ■ 障がい者福祉助成金

助成先レポート

Vol. 4

お弁当製造・販売に挑戦！

3カ月で早くも工賃アップの成果

葉山にも作業所がほしい——。そんな地域の声の実を結んで2002年に開設された作業所トントンは、お弁当製造にトライして、好循環の波をつかまえようとしています。

■現状打破は勇気の一步から

機織りなど自主製品づくりを作業の中心とする作業所トントンは、行政の応援もあって、3年前から町役場の売店も運営しています。

しかし、男性メンバー向きの仕事の不足や、売店業務に利益の限界を感じていたところへ、就労継続支援B型への移行という課題にも直面。これを契機に経営コンサルタントの診断を受けます。そこで提案されたのが「お弁当の製造販売」でした。売店のある町役場の周囲には公共施設が集まるものの、一般のお店がわずかしかなかったからです。

幸い、それまでずっと昼食はボランティアの助けも借りながら、メンバーが作業所内で自炊をしてきました。中にはマイ包丁持参で腕を振るう「通な」男性利用者もいます。新たに必要となった調理台やガス炊飯器、弁当箱の購入資金は、自己資金と財団の助成金で賄い、勇気を持

って一步を踏み出しました。

■変化が未来を運んできた

お弁当の販売・配達を今年4月からスタートさせてわずか3カ月。変化は着実に、かつ目に見えて現れてきました。お弁当製造は朝9時から開始、昼前には配達を完了させますが、これに関わるメンバーの工賃は月平均3300円から6500円へとほぼ倍に。1万円を超える人も5名に上ります。加えて、職員の甘粕さんは「それまでの作業はいうなれば個人プレー。今はみんなで『協働する』という側面が出て雰囲気が変わった」と肌で感じています。実際、忙しそうなお仲間がいると手伝いを申し出たり、製造に加わりたいというメンバーが増えているそうです。

利用者の一日にもメリハリが出たと語る雨宮所長はこの手応えを受けて、「夢はカフェの出店の助け合い拠点を目指したい」と目を細めました。



お弁当事業は調理以外にも食器洗い、調理服の洗濯など、仕事の幅を広げる効果もありました。配達先でコミュニケーションが生まれるのも魅力です。～メンバー・ボランティア全員で～



葉山町役場にある作業所トントンの売店。「働いてお金になるということが見えてくると、はげみになるんです」と職員



「そこにいけば誰かがいる...メンバーが集まれるカフェを作りたい」と夢が広がる雨宮由美所長(写真右)

特定非営利活動法人 青い麦の会 作業所トントン
神奈川県三浦郡葉山町一色716-22

ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 受賞者は今……

マナー教育から職場定着化まで

家族ぐるみの支援で雇用先の信頼得る

第6回受賞者

宮崎

潔さん

社団法人愛知県セルフセンター
名古屋市障害者雇用支援センター 所長

「当支援センターがオープンしたのは1999年。この10年、幸いにもセンターの利用者数も就職者数も、わずかではあります。背景には企業社会の社会貢献意識の高まり、法定雇用率1.8%への理解が広がってきていることがあるのでは」と語る宮崎潔さんを名古屋市熱田区の勤務先に訪ねました。



仕事は「創る」もの

人並みに働き、人並みの生活を送りたい。これが心身に障がいのある人たちのいちばんの願い。しかし、障がいのある人たちに対して就職への力べは厚い。昨今の不況がこれに厳しく追い打ちをかけていることは統計にも表れています。

ここに障害者雇用支援センターの活躍の場があります。といつてもその業務内容は多岐にわたります。支援対象のほとんどが知的障がい者である宮崎さんの支援センターの場合を見ても、ざっと以下のとおり。

①センター施設での一般教育―あいさつの仕方、協調、身だしなみなどについての社会生活教育。②就労



名古屋市障害者雇用センター（名古屋市熱田区）



● 仕事のやり方が一目でわかるよう、写真で示している



● イタリア料理のよし川エノテカでコック見習いとして就職。強力な戦力になっているとの評判も



● 愛知医科大学付属病院に4月1日付で職員として採用されたお二人

訓練—定形的な単純反復作業訓練など。③職（雇用先）探し。④雇用先との調整。⑤就職後の職場適応・定着支援。⑥雇用先への支援。⑦家族・関係者への支援。

宮崎さんに聞いてみました。

職場探しはどんな具合に？

ハローワークをはじめ新聞広告、チラシ、飛び込み、あらゆる努力をします。たとえばこんなことも。

たまたま新幹線の中で隣席の客に言葉をかけ、名刺交換をした。相手は名古屋市内の某中堅企業の役員。私は自分の職業や仕事内容を話した。相手は愛想良く「近くへきたら寄ってください」と。で、私、行くんですよ。びっくりしてました。そんなことでつきあいが深まって、今ではその会社で12人の障がい者を雇用してもらっています。

知的障がい、発達障がいの人だということと敬遠する企業が多い。法定雇用率未達で行政指導を受け、人事が躍起になって各部署に仕事の見直しを指示するが、わが方には該当するような作業はない、という返事しか返ってこない。それじゃ私の方から出かけていきますわ、といって相手企業にお邪魔する。むろん、人事とは連携の上で。その結果、この部署でこういう仕事ができるじゃないの、あそこにも障がい者でできる仕事がある、などと指摘して成功した例は少なくない。

最近ではこんな例がありました。ある大学病院。2000人近い職

員を抱え、障がい者雇用は法定数未達。相手もそのことを気にしていた。私どもは清掃作業に着目。が、もちろんそこにはすでに専門の業者が入っている。丹念に院内を見回って発見したのが、玄関脇や病室の溜まり場などに置いてあるほこりをかぶった貸出用の車椅子。

500台もあるんです。玄関などに汚れた車椅子が放置してあるということは、来院者に悪印象を与えか

職場定着率は85%

宮崎さんは三重県亀山市出身。生家は商家。幼い頃からボーイ・スカウト活動などに参加し、心身に障がいのある人たちと少なからず接する機会を経験してきた。また、宮崎さんの肉親に重度の身体障がい者がいて、当人、家族の苦勞を身をもって知っていました。

「障がい者の自立」は、早くから宮崎さんの大きなテーマでした。障がいがあっても、働ける人にはぜひ働いてほしい、という思いとともに、いつの頃からかそういう領域での仕事が見えたいと考えるようになっていきました。

そしてこの道30年、一貫して障がい者の就労支援にたずさわってきました。今の雇用支援センター所長としては10年、この間、ここを巣立って行った障がい者は300名。このうち就職して自立し、生活の安定を得ている人は250名という実績。

ねない。ぜひその清掃をと働きかけた。今、2名の知的障がい者がその仕事に従事し、いつも車椅子がピカピカに磨かれている。病院のイメージアップにつながっていると喜ばれています。

仕事探しにはきめの細かい注意力和やる気が必要だということを物語っていますが、一方、仕事は「創る」ものだとはこのことだと思いました。

成功率、じつに85%です。

最初の頃はたいへんでした？

30年前は法整備が不十分だった。企業側の意識も低く、知的障がいや精神障がいの人々の雇用をお願いに行っても、まさにけんもほろろ。話を聞いてもらうどころじゃなく、塩をまかれて追い返されんばかりの経験なんでもしました。

今は、助成金制度あり、ジョブコーチ制度ありで、障がいのある人はもちろん、われわれ支援関係者もたいへん助かっています。



● 熱心に訓練センターの説明をする宮崎さん（写真左）



文具をパッケージングするラインでの作業訓練

支援の第一人者は家族

宮崎さんは、就職支援で、当事者の家族の役割をとりわけ重視します。

支援の第一人者は、なんといつても当事者の家族たちだと宮崎さんは言います。

センターでは年に数回家族会を開催し、教育訓練の段階から家族にも活動に参加してもらう。障がい者個別の就職活動の段階になると、雇用先との面接という重要なステップがあるが、これには家族……可能ながら両親にも同行してもらう。これは相手側にとっても好印象を与えている。雇用を希望している障がい当事者が家族全体で支えられている、と

理解されるからです。

就職には本来に家族の協力は不可欠。自分の子どもはダメだからなどとは仮にも考えてはいけない。親が変わらなければ子ども変わらないし、幸せもこない。

——そして就職成ってから。

就職できた、あとは就職先にすべておまかせ、ではダメ。企業などの就職先は、障がい者に関する諸制度はもちろん、障がいそのものについても最初からよく知っているわけではない。だから、障がい者の性格、癖などを熟知している家族が、迷惑にならぬ程度に先方に向かいコミュニケーションをはかり、こちらが持っている知識、ノウハウを伝えようとする。つまり、家族は企業側という意味でのおつきあいをしてもいい、と宮崎さん。

もちろん、私どもの立場の者も、就職後の被雇用者、雇用主両者に対するアフターケアについて努力する。一般に福祉の場合、問題があつたら出かける、というのが普通だが、私どもは送り込んだ障がい者が順調に就労しているように見えても、定期的に職場を訪問させていただく。肩の一つも叩いて「がんばってるね」、「あしたは給料日だね」などと声をかける。とても喜んでもらえる。その夜、家族から、「きょう、訪ねていただいたそうです

ね。子どもから聞いた」と感謝の電話がかかってくる。

また、雇用主からは、ああ、いいところに来た、こんど機械が2台入るんで、新しい実習生を1、2人連れて来てほしい、と嬉しい声がかかったりする。

私は、この支援センターの職員採用の際など、基本条件として二つのことを重視します。一つは、障がい

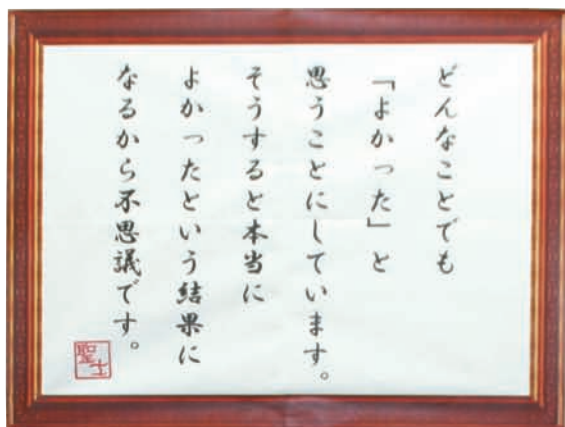
どんなことでも「よかった」と

どんなことでも『よかった』と思うことにしています」

宮崎さんが大事にしている言葉です。この言葉には続きがあります。

「そうすると本当によかったという結果になるから不思議です」

支援センターの会議室の壁面に、



者福祉にたずさわる者として、それにふさわしいプロ意識を持っているかどうか。今一つは、障がい者に対して身内意識が持てるかどうか。

——身内意識？

ここへ来所する人はすべて心身に障がいのある人。それらの人たちに肉親のような身内感情で接することができるとか、ということ。でなかったらここでの仕事はできない。

この文言が額装して掲げられています。

似た意味の格言、箴言のたぐいは他にもいくつかあります。が、この文言ほど素朴、明快、率直な表現を知りません。

この言葉は誰に向けて発せられたのか。自分自身、職員、いや、すべての人に通じる言葉ですが、やはり第一は、障がい者とその家族。

宮崎さんの弁。

「障がいを持っている人、その親御さんたちというのは、どっちかというと自信喪失型、悲観的になっている人が少なくない。もっと胸を張って、と言っても張れない。ならば『よかった』と。どんなことでも『よかった』と思えない、と。一種の暗示療法でしょうか」

障がい者とその家族に対する宮崎さんの熱い思いを見た気がしました。

取材・文 高田 三省

この街で、
一緒に生きていく。



(財)ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコメール便配達事業

就職という夢を、 メール便配達のカバンにつめこんで。

長野県松本市。遠くに北アルプスなどの美しい山々を望むのどかな街で、メール便配達に取り組み、松本市北ふれあいホームのメイトさんたち。一般企業への就職という明確な目標を持つ彼らは、独自の「メール便検定」やマニュアルをつくって、仲間たちとともにステップアップを図っていました。



一人ひとりの目標が書かれた短冊。目に付くのは就職という文字。

6人のメイトさんが働く、松本市北ふれあいホーム。この施設に入って最初に目に付くのが、入り口近くにずらっと張られた短冊。一人ひとりの目標が書かれたその短冊には、「就職」という大きな文字がいくつも書かれています。

就職という明確な目標を持つ彼らのために、ここでは業務にさまざまな工夫を凝らしています。そのひとつが、メール便検定。メール便配達を「初級」から始めて、独自の検定に合格した人から「中級」「上級」へとステップアップしていくしくみです。「初級」は2人以上で配達、「中級」は1人で配達、「上級」はリーダーというふうに規定しています。

メール便検定が、
就職への道しるべに。

メール便配達を始めて間もない平林さん(左)と長瀬さん(右)は、まだ初級クラス。二人で協力して配達をこなしています。



「施設の中ではできない経験をしています。外に出て初めて、自信は持てるようになるんですね」と職員の小口さん(右)。メイトさんの土屋さん(左)。

このユニークな検定をつくったのは、ホームの精神保健福祉士の小口さん。実は、一般企業に勤めていた経験を持つ彼女。その経験を障がいがある彼らの就労支援に大いに役立てていました。メール便検定も、そんな彼女が考え

出した、彼らの頑張りを支えるシステムのひとつなのです。「上級クラスになれたらちゃんと就職もできるんだよって、いつもみんなに言っているんです」就職を望む彼らにとつて、小口さんのこの言葉は大きな励みになっているに違いありません。現にメール便検定上級者から、就職を果たした人が1人、就職に向けて研修中の人が2人も出ています。

「就職していく仲間を見て、みんながさらに頑張る気持ちを持てたいです」(小口さん)

小口さんの指導は、彼らが社会に出たときに戸惑うことがない

●松本浅間センター

面積47.7㎡／人口23,940人／世帯数10,145世帯

●社会福祉法人 松本市社会福祉協議会 松本市北ふれあいホーム

2008年5月メール便配達開始 利用登録者数 約29名
メール便配達の他、パン製造販売、「ふれあいショップ沢村」運営など。

「障がい者のクロネコメール便配達事業」

お問い合わせは……(財)ヤマト福祉財団 押尾

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

e-mail y.zaidan@yamatofukushizaidan.or.jp



いつもこのレストランでは、メール便を手渡し。お店の方から直接、ごろうさまと言われるのがうれしいと藤井さん(左)。



初級クラスの藤井さん(左)を、上級クラスの土屋さん(右)がサポートしながら配達。



施設内での仕分け作業風景。メイトさんだけで、てきぱきと仕分けが進みます。

よう、彼女の職業体験から導き出された細やかなものでした。

たとえば検定では、「中級」なら・チームメイトと協力できること・状況に応じて臨機応変に対応できることなど、「上級」なら・チームをまとめて業務を遂行できること・困ったときにスタッフに相談できること、などの判定基準を設けています。

「判定で重視しているのは、相談ができることです。会社は組織で動いているので、なにかあったときに個人で判断しないことを学んでもらっています」(小口さん)と、まさに実践的。

また検定のほかにも、業務をミスなく完了するための綿密なマニュアルを作成。できなかったことを責めるのではなく、どういしくみにしたらできるようなにかということを考えて、みんな



後列左から／渋谷アツ子さん「まず、こちらから挨拶をしよう」と心がけています」／平林芳尚さん「山の上の一軒家に苦労して届けたら、ありがとうと言われてうれしかった」／長瀬謙さん「この仕事で、やりとげのことを学んだ」前列左から／職員の小口静さん「責任感で、みんなの顔つきまで変わってきました」／藤井久恵さん「始めたころ、誤ってビニールを破ったことが今でも悔しい」／土屋香さん「毎日、頑張ってるよと母が送り出してくれます」

で作り上げたというこのマニュアル。初級クラスの平林さんも「最初は不安でしたが、マニュアルを読んでみたら、このとおりやればだれでもできるなと安心しました」と話すように、今ではみんなが頼りにする指南書となっています。

こうした小口さん達職員の創意工夫とヤマト運輸担当者のサポート、メイトさんたちの努力で、当初は一日かかっていた配達

が、2、3ヶ月後には2時間でできるようになりました。

クロネコさんと呼ばれるので、きちんとしなくちゃいけない。

メール便配達を始めてからの彼らの変化には、驚くものがあったそう。体力がついたことだけでなく、以前は街の様子にまっ

たく関心をしめさなかったメイトさんが、天気のことや、道に花が咲いていてキレイだったなど、感じたことを話すようになったといいます。「まわりの様子に気づく、心の余裕を持てるようになったんだと思います」(小口さん)

また、ヤマト運輸の制服を着て配達をすることで、企業の一員として働く責任感も生まれました。

「街の人がクロネコさんと呼んでくれるんです。だから、いつでもきちんとしていなくちゃと思っています」と、上級クラスの渋谷谷さん。制服を着ているときは、歩き方まで気をつけているといいます。

松本インター支店のメール便リーダーの内田さんも、彼らの仕事に対するひたむきさを印象にあげます。「エリアが広がったときに大変だなあと思ったのですが、彼らは、今まで行ったことがないところに行けるようになってうれしくて言うのです。ピツクリしました。ほんとに前向きなんです」

ヤマト運輸のスタッフの多くが彼らの仕事を評価するのでも、こうした仕事に向かうまっすぐな姿勢を目の当たりにするからでしょう。



「複数の施設で協力して取り組むという方法も、ありえると思います」と話す。(写真左から)松本インター支店 新井宏正支店長・内田ちず江メール便リーダー、松本主管支店 笠井勝美メール便課長、北信越支店 青木浩昭事務長

「クロネコヤマトのドライバーさんに道で挨拶されると、仲間意識を感じてとてもうれしいと言います。仕事をする喜びを彼らに教えられています」(松本主管支店 笠井メール便課長)

「家族に障がい者のいるメイトさんが、積極的に休日のフォローをしてくれるという話しも聞きます。この事業を支援してくれる人の熱意に応えるためにも、エリアを工夫して機会をどんどん増やしていきたい」(松本インター支店 新井支店長)

目標があれば、そこに道が生まれます。少しずつでも前に進めたら、その喜びは小さな自信となって人に力を与えてくれます。メール便配達をやりとげたことで培った自信は、これからの一人ひとりの人生に大きく役立っているに違いありません。

「メール便を配達することは、社会参加すること。」

クロネコメール便配達特別報告会 IN 大宮ソニックスシティ

「障がい者のクロネコメール便配達」は、事業開始からこの10月で5年となりました。1300名を超えるクロネコメイトさんが全国で従事する中、8月22日に首都圏初の特別報告会を埼玉県大宮市で開催しました。



ゆめきた工場の有坂一美さんとサポートの国田徹さん(左)



熱心に聞き入る参加者のみなさん



「工賃も上がり、プラス思考になれた」と、田中裕一さん

◆ 楽しみながら 取り組んでほしい

ヤマト福祉財団では、昨年からクロネコメール便を配達する本人の声を聞いて地域参加や共生社会づくりについて考える特別報告会を仙台、大分で開催しています。首都圏初の開催となった今回は、関東地区の11施設・23名のクロネコメイトさんとそれを支える17名の施設スタッフのみなさん、そして118名の参加者にお集まりいただきました。挨拶に立った有富理事長は、「効率よく、楽しくということがキーワードになると思います。お客様に喜ばれるということは、配達者にとって幸せなこと。そして、やり方を工夫して効率が上がっていくと仕事が楽しくなりますよ。楽しみながら取り組むことをぜひ心がけてください。」とクロネコメイトさんへの期待を述べました。

◆ ありがとまでは社会参加を表す大切な言葉

埼玉県立大学保健医療福祉学部の朝日雅也先生は、「障がいのある人が働くということ」と題

ご協力ありがとうございました。
みなさまのおかげでまた、理解の輪が大きく広がります。
報告施設・作業所▼社会福祉法人ひだまり会 地域活動支援センターつばさ／NPO法人小山そよかぜ／NPO法人オリエール ゆめきた工房 特定非営利活動法人 志木市精神保健福祉をすすめる会／地域活動支援センターはれはれ／地域活動支援センター第2けやき／シャロームの家／青い麦の家／社会福祉法人結の会 オフィスクローバー／社会福祉法人はる／じこせ

◆ 品質向上の工夫も

した基調講演で「働くということ」とは、お金のためだけでなく、働く仲間やお客様とのやりとりを通して社会とつながっているなという実感が大事です。障がいのあるなしに関わらず、ありがたいの一言は社会参加を表すとても大切な言葉なんです。」とクロネコメイトさんの気持ちを参加者へ伝え、最前列に座るクロネコメイトさんも大きくうなずきました。

◆ 自分の体調管理に役立つ

本人報告では、メール便の仕事に対する責任感や任された喜び、お客様から声をかけていただいたときの感動について数多くの報告がありました。別の視点で報告した人もいます。

地域活動支援センター第2けやきの河西清仁さんは、「発病して20年くらい経ちます。私にとって病気は孤独。施設でのメール便のミーティング活動は、私にとって過去の自分の生活の危機管理の集大成としてその管理力を高めるために重要です。これからも自立に向かっていこうと思います。」と障がいと向きあう自分のことを報告しました。

◆ はじめて聞いた生の声

はじめて聞く生の声に感動した参加者も多かった今回の特別報告会。参加者にはメール便をやってみたくて聞いていた人もいて、早速ご連絡をいただきました。仕事のことや障がいのことを率直に報告した23人のクロネコメイトさんの協力によって、また新しい関係が生まれています。

障がいと向き合って生きる人を知ることで、「ともに働く仲間」として迎え入れる動きが広がることを願っています。

スワン工舎卒業生訪問

スーパーマーケットが 僕たちの働く場です



スワン工舎新座では障がいのあるメンバーが、一般就労に求められるスキルを身につけようと、日々励んでいます。今回は、関東圏でチェーン展開をはかるスーパーマーケット「ヤオコー」様で元気に働くOBを訪ねました。

■株式会社ヤオコー 創業昭和49年。食料品をメインとするスーパーマーケット100店舗を、埼玉県を中心に関東圏で展開しています。

■ヤマト自立センター スワン工舎新座 就労に必要な知識や技術の習得～就労先とのマッチング、さらに就労後の定着まで。2006年より一貫した活動で、障がい者が地域で自立するための支援をしています。就労実績：40名



入曽店／佐藤麻登さん(2008年11月1日入社)
コーナーを任されたことで自信も出てきたという佐藤さん。特別支援学校時代にスーパーマーケットでの企業実習をした経験から、ヤオコー様での採用を目標にスワン工舎で訓練を受けてきました。



上福岡西口店／福井 生さん(2007年3月3日入社)
福井さんはアイスの発注を任されるようになって、天気予報を欠かさずチェックするようになりました。「天気によって発注の数が変わります。暑い日は多めに発注しなくちゃ」と福井さん。



三芳藤久保店／外山敦史さん(2007年7月3日入社)
「陳列のために飲料を毎日運ぶので、けっこう体力仕事。汗はかきますね。夏のボーナスは3、4万円ぐらい。すごく嬉しかったです。お母さんにまず渡して、そこからすこし貰いました」

分け隔てなく、長い絆を

3年前に採用された福井さん以降、株式会社ヤオコー様では外山さん、佐藤さんの3名のスワン工舎OBが「パートナー社員」としてお店に立っています。障がいのあるなしを問わず、みんなであいっしょにお客様に貢献しよう、というのが株式会社ヤオコー様のポリシー。現在91名の障がい者が一般スタッフとともに汗を流しています。

人事部の山内桂子さんに、卒業生の働きぶりをお伺いすると「3人とも仕事ができますし、周囲のスタッフにもうまく溶け込んでいますよ。自己管理シートを使ってその人の現状のレベルでできること、がんばってできること、を確認しながら、少しずつ仕事の幅を広げていきます」と話してくれました。

各店を巡回した際に、主任さんに指示の出し方などアドバイスする場合、「できる方の場合、ついついこちらも期待が勝り、ふだんの勢いでスキルアップを求めてしまいがちになるので、そこは注意しています。無理を強いてミスが発生してしまうと、やり直しになってしまう、結局は互いの信頼関係が壊れてしまいますから」。

彼らの中にはちょっとしたことで過度の不安や緊張を感じる



人事部第一採用担当 山内桂子さん

人もいれば、責任感が強すぎて、体調が悪くても無理に出勤してくるようなケースもあります。山内さんは「相互のコミュニケーションがとれても大事で、周囲からの『大丈夫だよ』の一言が流れをスムーズにする。不安要素が減るとのびのびと働くことができ、自分の居場所が見つかる」と指摘します。

「面接・採用・配属と一緒に歩んできているので、感覚は家族のよう。彼らが店のスタッフにかわいがってもらえれば言うことはありません」と山内さん。

採用した方々が不都合を感じることなく末永く勤めてくれればと願っているそうです。

株式会社ヤオコー様では、障害者雇用促進法の改正も踏まえ、今後もさらなる採用を推し進める予定です。



ユニフォームも新しくなって、嬉しいオープンの笑顔です！



通りを歩く方からも商品がより良く見えるようになりました



海津 歩社長



スワンベーカリー銀座店 12年目のリニューアルオープン 徹底したお客さま目線で、社会的企業のゴールを目指す

1998年6月、銀座2丁目の一角に、青と白のロゴが眩しい一軒のベーカリーが開店しました。
スワンベーカリーの記念すべき1号店です。
今秋、オープン以来のリニューアルを実施した銀座店の新コンセプトと、株式会社スワンの今後に展開について、海津社長にお伺いしました。

本物志向のお客様に ご満足いただける店づくり

スワンベーカリー銀座店が装いも新たに9月28日、創業から12年目のリニューアルを果たしました。改修の狙いは、「パンをきれいに见せる店づくり」、「お客さまが買いまわりしやすい店づくり」——12年の歳月で老朽化した棚や備品の修繕をきつかけとして始まった今回のリニューアルで追求したのは、お客さま目線の徹底です。

そのわけは、フレッシュベーカリーを取り巻くビジネス環境の厳しさにあります。スワングループの売上は前年比維持としているものの、多くのフレッシュ・ベーカリーが苦戦しているのが現実です。創業時はフレッシュベーカリーで差別化が図れ

ましたが、今はもう市場が成熟し、コンビニエンスストアでも、手軽な値段でそこそこのパンを買い求めることができます。

ですから、スワンベーカリーが今後も生き残っていくために、自分たちの強みを生かすことをまず冷静に考えてみました。競合相手と同じ土俵で戦っても先行きは見えません。

そこで出てきたキーワードが「焼き立てのパン」「フレッシュ」、「パンの専門店」「ベーカリー」。——徹底したフレッシュベーカリーであることです。

パンのこだわり、 人のぬくもり

リニューアルの具体的なコンセプトは三つです。

まず「商品」については、試食サービスなどを行い、スワン

のパンの魅力をアピールします。食事用のパンの充実など、パン専門店ならではの品揃えをはかります。

二つめの「ディスプレイ」は、精魂込めて焼き上げたパンを店内だけでなく店外からもよりきれいにご覧いただけ、また選びやすいよう店内を改装します。

最後に掲げるのが「ヒューマンな応接」です。コンビニエンスストアは巨大な、言わば街の自販機のような存在です。機能的ですが、なにか淋しい感じもします。スワンベーカリーが目指すのは別のところです。

ヒューマンな応接の神髄は、それぞれのお客さまに対して「小さなちよつとしたことをたくさんやる」ことだと考えています。たとえば、お客さまへの挨拶も単に「いらっしゃいませ」ではなく、お客さまの名前が分かっていたら、お名前も含めてご挨拶する…。これは単に商売としてやるものではありません。

あくまで主体はお客さまと位置づけたうえで、さらに商品の価値、「障がい者が生き生きと働いている」ことの意義や魅力もプラスすることで、他に代わりの効かない（スワンベーカリー）を目指していきたいと思っています。パンの消費が落ちる夏に、タカキベーカリーの研修センタ

スワンカフェ&ベーカリー 太陽の家店が 10月5日オープンしました



店舗DATA

大分県別府市大字内電1393番1
電話番号▶0977 (67) 3634
営業時間▶7:00~20:00
定休日▶不定期
アクセス▶JR亀川駅より徒歩10分
JR別府駅より車で20分
大分空港より車で40分



慶應義塾創立150年記念 「日米社会イノベーターフォーラム'09」 8月30日開催

仕事を通して社会によりよい変化を起こす…
日米で活躍する社会起業家の取り組みを共有し、意見交換が行われました。このフォーラムでスワンの取り組みをお話する機会がありました。



あたらしい仲間から 謙虚に多くを学びたい

1で製造・販売研修を行ったのもその一環です。店舗リニューアルと同様、将来に向けての体制固めがその背景にあります。

また、頼もしい仲間がスワンベーカリーの仲間に加わりました。九州のスワンカフェ&ベーカリー「太陽の家」店です。

1965年に大分で開所して以来、つねに革新的な取り組みで障がい者の自立に大きな実績を残してきた社会福祉法人「太陽の家」。障がい者の働く環境づくり、作業体制づくり、経験豊富なノウハウをお持ちで、私も見学にお伺いしましたが、メモを取り切れないほどの刺激を受けました。

スワンベーカリーには現在、発送業務を担当する物流部があります。まだまだステップアップが必要な状態です。いずれは外部の発送業務も受注したいと考えていますので、作業工程の改善などの面で、「太陽の家」さんから我々が勉強すべきことはたくさんあると思います。

社会的企業スワンの ゴールとは…

近年、「社会的企業」が非常に注目されています。環境や教育、福祉、地域再生など、社会的な

課題の解決に対し、事業として取り組む試みです。

株式会社スワンの代表者として、私も「日米社会イノベーターフォーラム」などのような場で体験やノウハウの披露を依頼されるようになりました。しかし一方で、道はまだまだ険しいと感じずにはいられません。

昨年、スワンベーカリーには、国内外から1761名もの方々が視察にお見えになりました。創業してから11年以上が経つにもかかわらず、まだ多くの人が「スワンってどんなことやっているんだろう?」という風にやってくるんだろう」と見学に来られるということは、裏を返せば、私たち自身についてまだまだ理解されていないし、日本の社会状況がまったく変わっていない

ないことの現れだと思っています。

世のため人のため「あったらいいな、してほしいな」という、それまでない新しいことを始めるのが社会的企業の役割だとすれば、そのゴールとは何でしょう?

それは、宅急便がそうであったように生み出されたサービスが「コモセン」常識、当たり前になることなのではないでしょうか。そして、コモセンになるためには「持続」が必須の条件です。

「スワンがコモセンになる」まで、がんばるんだということ肝に銘じて、励んでいきますので、これからもスワンベーカリーの挑戦にご理解をお願いしたいと思います。

2009SWANのX'mas ケーキ



今年のクリスマス 「安心」は家まで届く

小麦アレルギーのあるお子さんにも安心です ハッピーサンクス

今年の「ハッピーサンクス」は、クリーミーな口だけはそのままに、卵・乳製品に加え、小麦も不使用になりました。

全国どこへでも、ご自宅までお届けします。

申込み: 11/1 ▶ 12/5 お届け: 12/20 ▶ 12/24

■作業所でもスワンのケーキを取り扱うことができます■

(株)スワン本部 担当: 藤野まで (TEL03-3543-1067)



リニューアル記念として10月末日まで「ヤマト福祉財団NewSを見た!」と言ってご来店された方には、ステキなプレゼントを用意しています。

**今年も「夏のカンパ」より
4,600万円のご寄付をいただきました
ありがとうございました**



山下稔之中央副執行委員長（左）より贈呈されました

9月17日、グランドプリンス新高輪ホテルで開催中のヤマト運輸労働組合第64回定期中央大会の中で、夏のカンパの贈呈式が行われました。この夏のカンパは、ヤマト運輸労働組合とヤマト労連で行われているカンパニア活動です。

ご寄付を受け取った有富理事長より、組合員代表のみなさんに向けて「ありがとうございます。みなさまのあたたかい気持ちを受け取り、このご寄付を障がいのある方に行っている財団の支援事業をさらに補強し、結果が出るように、そして必ずみなさまに喜んでもらえるような使い方をします」と、お礼のあいさつをしました。



「ご寄付を有効に使うことを誓います」と有富理事長

**『工賃5万円』に向かって着々と
実践中の施設から
第三回障がい者の働く場づくり応援プロジェクト報告会**

「障がい者の働く場づくり応援プロジェクト」の報告会を9月25日、ヤマト運輸本社会議室で行いました。3回目となる今回は、『共同作業所れすと』『さざなみ第2作業所』『エコンファミリー』の3施設が1年をかけて専門家と一緒に検討した経過を、続いて第1期、第2期の施設が『その後』の実践状況を報告しました。

新商品の開発、売り上げや工賃アップなど、着々と『工賃5万円をめざして』という目標に向かってどの施設も実戦しています。

有富理事長は最後に「目標に向かって計画・実行・反省と、PDCAを回していく中で最後のアクション（計画修正）が大事。ただ『反省して頑張ろう』というのではなく、そこを工夫する・・・変化するお客様のニーズを捉えてさらに工夫することを繰り返してほしい。『買ってくれるお客様が喜んでくれるということは是が非でも達成するんだ』という旗印を掲げて工夫を積み上げていただきたい」と参加者を激励しました。



**2009年度パワーアップセミナー
初級編に新しいワークショップ**

6月から10月初めにかけて、九州を皮切りに全国5ヵ所で開催したパワーアップセミナー初級編が終了しました。

今年は初級編にもワークショップが取り入れられました。内容は、参加者自身の事業所の問題点を整理し、課題を解決するための新しい発想法を学びながら、工賃アップへ向けての実行計画を作成するというものです。ただ講義を聴くというだけでなく、自分で考えグループで議論を行い、設定したモデル事務所の実行計画を立てる経過にさまざまな学びがあるという、新しい試みです。

参加者のみなさんに5万円の工賃を実現するためのヒントをたくさん持ち帰っていただこうと、講座内容もより実戦的に変化しています。



ワークショップ「給料5万円の実現！ 発想が変われば、働く場が変わる」

13回連続参加のふくしねぶた ～青森ねぶた祭り 8月4日



ボランティアと一緒にねぶたを満喫する障害者

**思い思いに
ハネト満喫
ふくしねぶた**
青森市内の障害者やボランティアが、ねぶた祭を通じて親睦（しんぼく）を深める「ふくしねぶた」（市社会福祉協議会主催）の450人が4日、ヤマト運輸のねぶたとともに出陣。ハネトの衣装をまとい、手作りの手持ちねぶたを掲げて、祭りの熱気を満喫した。ふくしねぶたは今年で29回目。車いすなどの参加者たちは「ラッセル」の掛け声に合

東奥日報
2009年8月5日



2年連続の観光コンベンション協会会長賞を受賞した「ヤマトねぶた」
ねぶた師の北村隆氏が制作に取り組んだ「白梅」



当日運行したねぶたの中では最大。「ラッセル」のかけ声で意気が上がる



有富理事長もふくしねぶたに参加

「基本の大事さを体感しました」 スワンベーカーリー製造・販売レベルアップ研修

タカキベーカーリーの研修センターで9月5日～6日、スワンベーカーリー製造・販売レベルアップ研修を行いました。

海津社長の「ここでプロとして、基本に戻ってスキルを学んでいきましょう」というあいさつで研修がスタート。17名の参加者は全国のスワンベーカーリーのスタッフです。

製造研修では、生地取り扱いについて温度や時間に変化した時にはどうなるかを、味・風味・形・焼き色などを比べて確認しました。レシピ通りに作らないと味や風味がまったく違うことを学び、作業を「慣れ」で進めていないか、基本をチェックする機会となりました。



「勉強になった」「基本の大事さを体感した」「定期的に研修を」と参加者



喫茶店、菓子製造、豆腐製造販売で工賃アップをめざす共同作業所



パティシエの指導で新しいお菓子を開発し、店舗移転をめざすさざなみ第2作業所



「工賃アップをするという、ぶれない意識を持つことが大切」とエコファミリーの報告

国立西洋美術館開館 50 周年記念事業 古代ローマ帝国の遺産

～栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ～



ブッラ／
ナポリ国立考古学博物館



皇帝座像（アウグスト
ウス）／ナポリ国立考
古学博物館



庭園の風景（南壁）部分／ボスコレアーレ、アンティクアリウム



双頭の蛇の指輪／ナポ
リ国立考古学博物館



豹を抱くディオニュス
／ノーラ考古学博物館

All photographs©Luciano Pedicini/Archivio dell'Arte

開催期間▶2009年9月19日（土）～12月13日（日）
休 館 日▶毎週月曜日（ただし、9月21日、10月12日、11月23日は
開館、10月13日（火）、11月24日（火）は休館）
開催場所▶国立西洋美術館（東京 上野公園）
●JR上野駅下車（公園口出口）徒歩1分
京成電鉄京成上野駅下車 徒歩7分
東京メトロ銀座線、日比谷線上野駅下車 徒歩8分
開館時間▶午前9時30分～午後5時30分（金曜日は午後8時）
※入館は閉館の30分前まで

観 覧 料 ▶

	一般	大学生	高校生
当日	1,500円	1,200円	700円

○心身に障害のある方及び付添者 1 名は無料（入館の際に障
害者手帳をご提示ください）。

問い合わせ先▶

ハローダイヤル 03-5777-8600

展覧会公式HP <http://roma2009.jp>

国立西洋美術館HP <http://www.nmwa.go.jp/>

主 催▶国立西洋美術館・東京新聞・NHK

後 援▶外務省・文化庁・イタリア大使館

特別協賛▶住友金属鉱山

協 賛▶日本写真印刷・EPSON

巡回情報▶

2010年

1月 6日（水）～3月22日（月・振替休日）愛知県美術館

4月10日（土）～6月13日（日）〔予定〕青森県立美術館

7月 3日（土）～8月22日（日）〔予定〕北海道立近代美術館

※出品作品は都合により変更になる場合があります。

Information of the Art

■繁栄の礎を築いたローマ皇帝
300年以上の長きにわたる繁栄を謳歌したローマ帝国。地中海はおろか、西はイペリア半島、北は大ブリテン、東は小アジアにまで広がった帝国は、紀元前27年、尊厳なる者の名を与えられた初代皇帝アウグストゥスの即位に始まります。アウグストゥスは「パクス・ローマナ（ローマの平和）」を導き、永遠の都ローマの礎を築きました。

■贅沢なコレクション、最新の展示技術
本展では、帝国の誕生から繁栄の極みまでを、アウグストゥスを足がかりにイタリアが誇る至極のコレクションで紹介。ソンマ・ヴェスヴィアーナから出土した小さな豹を抱くデオニュス像のほか、VR（バーチャリアリティ）技術で、かつての街並みを映像で再現する試みまで。ローマの鼓動が感じられる贅沢な機会です。本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

ヤマト福祉財団全国支部連絡先（ヤマト運輸（株）内）

支 部	事 務 長	連 絡 先
北海道支部	加藤房男	TEL.011-891-5040
東北支部	小原 守	TEL.022-374-8065
東京支部	樋口光徳	TEL.03-5564-3705
関東支部	塚本良輔	TEL.045-508-6106
関東支部東地区	平井 忠	TEL.043-259-7364
北信越支部	青木浩昭	TEL.025-231-9512
中部支部	矢野静香	TEL.052-725-3633
関西支部	石田久雄	TEL.06-6682-8570
中国支部	竹下憲雄	TEL.082-849-1451
四国支部	内山 修	TEL.0877-46-7875
九州支部	目野和彦	TEL.092-931-3310
沖縄支部	古謝盛裕	TEL.098-840-3605

賛助会員個人51,609人 法人ヤマトグループ45社（2009年3月31日現在）

本誌の無断転載・転用を禁じます。©（財）ヤマト福祉財団

アメリカ大豆協会認定の大豆油インクを使用しています。

